

生徒の学びの機会をどう保障するか？

—多様化する生徒、学びを組織的に支援するための視点とリーダーシップ

開催レポート

2025年3月18日(火)に、VIEWnext 高校版1月号 特集テーマ連動オンラインセミナー「生徒の学びの機会をどう保障するか？—多様化する生徒、学びを組織的に支援するための視点とリーダーシップ」を開催いたしました。生徒の学びの機会を保障するために求められる管理職の視点とアクションについて、福井大学連合教職大学院の中森一郎教授と、VIEWnext 編集部統括責任者の柏木崇が語り合った模様をレポートします。

概要
※敬称略

◎日時 2025年3月18日(火) 15時30分～17時00分 ◎形式 オンライン

◎プログラム

【第1部】特集解説

生徒の学びの機会を保障する上での課題と先進事例 VIEWnext 編集部 高校領域責任者 河野仙一

【第2部】対談

多様化する生徒、学びを組織的に支援するための管理職の視点とアクション

福井大学連合教職大学院 教授、独立行政法人教職員支援機構 フェロー **中森一郎**

VIEWnext 編集部 統括責任者 **柏木 崇**



福井大学連合教職大学院 教授
独立行政法人教職員支援機構 フェロー

中森一郎

福井県の公立高校に国語科教諭として勤務後、福井県教育庁課長（学力向上）、福井県立若狭高校校長、福井県教育庁学校教育監等を歴任。若狭東高校勤務時は、若狭地区の県立高校再編整備にも携わった。現在、独立行政法人教職員支援機構のフェロー（学び合う教師コミュニティの形成支援）も務める。



VIEWnext 編集部
統括責任者

柏木 崇

第1部 特集解説

生徒の学びの機会を保障する上での課題と先進事例

冒頭、VIEW next編集部 統括責任者の柏木崇が、開会の挨拶として、2024年度で創刊50周年を迎えた『VIEW next』高校版の「答えが1つではない問いを探究する教育情報誌」という編集方針を説明した。そして、本誌の特集をさらに深めるためにオンラインセミナーを実施していると述べた。

続いて第1部では、同編集部高校領域責任者の河野仙一が、『VIEW next』高校版1月号の特集の解説を行った。まず、本特集の課題整理のページで示した、生徒の学びの機会を保障する上での3つの課題について語った。1つめの「学校の小規模化」については、高校数と生徒数の推移に関するデータを示した上で、「企画立案当初

は、学校数や生徒数の減少が課題であると考えていましたが、事例の1つである北海道高等学校遠隔授業配信センターを取材した際、佐藤豊記先生から、『学校数の減少は生徒数の減少に比べて緩やかであることから、1校あたりの生徒数が減少していることに目を向けるべきだ』と伺い、『学校の小規模化』を課題の1つとして取り上げることになりました」と課題整理の背景を明かした。そして、クラス替えができない、クラブ活動や部活動の種類が限定される、配置できる教師数が限られるため生徒が履修できる科目が限られるといった、「学校の小規模化」による様々な学校運営上の問題を説明した。

2つめの「生徒の多様化」については、特別な支援を必要とする生徒が通常学級にも一定数在籍しているものの、十分な支援が行き届いていないと感じる教師が多い現状を、文部科学省のデータを基に解説した。

3つめの「探究学習等の学びの充実」について河野は、「高等学校教育の在り方ワーキンググループ」における議論の中で、新しい時代に対応した高校教育のあり方の1つとして求められているのが、高等教育機関や地域社会等の関係機関と連携・協働した高度な学びであると説明。そうした学びの実現に向けては、地方公共団体や企業、大学などと連携・協働した地域・社会の問題解決に向けた探究学習、教科等横断的な学びの場が必要であることを述べ、「教師が探究学習の効果として手応えを感じていること・今後力を入れたいこと」について現場の教師に聞いたベネッセの調査結果に触れ、地域の多様な人材が学校教育にかかわり、協働することが求められている背景を改めて説明した。

後半は、3つの課題に対応する取り組み・仕組みとして、**①遠隔授業**、**②定時制**、**③通信制**、**④地域連携**のそれぞれの概要と先進事例を紹介した（写真1、下記枠内）。

①遠隔授業……北海道高等学校遠隔授業配信センターの取り組みを紹介。北海道は小規模校が多く、そうした学校では教師が少ないため、設置できる教科・科目が限られている。そこで同センターは、リアルタイムで多様かつ質の高い授業を道内の各校に配信している。同センターでは授業改善に注力するために業務の精選・効率化を図るとともに、教師間の情報共有や挑戦し続ける風土を大切にしている。

②定時制……昼夜2部制・単位制を採用している宮城県・仙台市立仙台大志高校の実践を取り上げた。同校は、多様な生徒のニーズに応えるために、例えば、特性上の課題を抱え、指導上、特別な配慮が必要な生徒に関する情報を、非常勤講師も含めて共有する『生徒を知る会』を実施している。

③通信制……岡山県・私立岡山理科大学附属高校通信制課程の実践を説明。同校は、自宅・学校のどちらで学んでも単位修得が可能であり、必修科目以外は生徒が履修科目を選択する。そこで、生徒が自ら登校時刻や出席する活動を決めて記録する「ジブン割」と呼ばれる取り組みを導入するなど、自ら学びを自己選択・決定できる仕組みを整え、自己管理能力の育成を図っている。

④地域連携……島根県浜田市内の5つの県立高校と浜田市による「HAMADA教育魅力化コンソーシアム」と、宮崎県立高千穂高校の取り組みを紹介。前者は地元企業と高校生を結びつける活動などを行い生徒の学びを充実させ、後者は地域資源を活用した教育を実施し、学校魅力化に取り組んでいる。

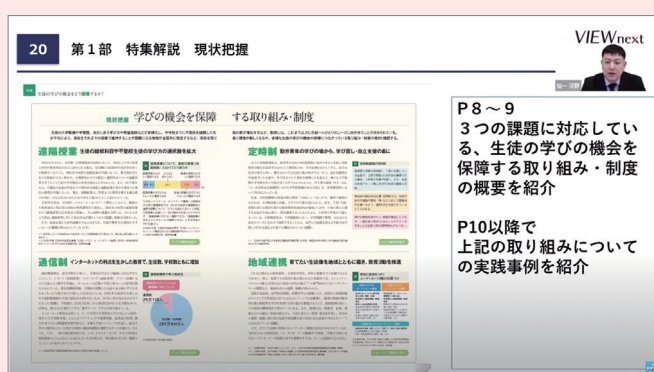


写真1 特集解説では、誌面を投影しながらポイントを解説。現状把握では、「遠隔授業」「定時制」「通信制」「地域連携」の取り組み状況や制度が紹介された。

そして河野は、読者から寄せられた本特集の感想を紹介した。「不登校への対応の事例が参考になった。生徒の多様化が進む今、全日制にこだわらない学校改革が必要だ」「定時制や通信制の学校の状況など、全日制の学校では気づきにくい視点で様々なことが記載されていて、参考になった」など、課題の当事者ではない教師にとっても、3つの課題は今後顕在化してくるものとして認識されている様子が伝えられた。

多様化する生徒、学びを組織的に支援するための管理職の視点とアクション

第2部では、福井大学連合教職大学院の中森一郎教授とVIEW next 編集部 統括責任者の柏木崇が対談を行った。本誌で提示した、生徒の学びの機会を保障する取り組み・制度として注目されている「遠隔授業」「定時制」「通信制」「地域連携」についての先進事例から、全国の学校はどのような視点や考え方を取り入れることができるのかを改めて整理しつつ、生徒の学びの機会の保障に向けて必要な管理職の視点とアクションについて、セミナー参加申し込みの事前アンケートで視聴者から多く寄せられた質問に回答しながら語り合った(写真2、図)。

まず、「学びを自己選択・決定できる仕組みの構築」について柏木は、学習指導要領の次期改訂に向けた審議事項の中で「子供が学びを自己調整し、教材や方法を選択できる学習環境デザイン」「生徒の多様性に応える柔軟な教育課程の実現のための、全日制・定時制・通信制を含めた諸制度の改善の在り方」といった形で触れられていると説明。ただし、自校内で多様な科目を設定することなどは難しい学校も少なくないことから、本特集では中森教授が「他校や大学等の授業の履修を卒業単位に認定したり、他校と遠隔授業を行ったりする」といったことが考えられます」と述べた。そこで本セミナーでは「学校外における学修の単位認定」について中森教授が解説し、そうした取り組みを行っている学校が柏木から具体的に紹介された。

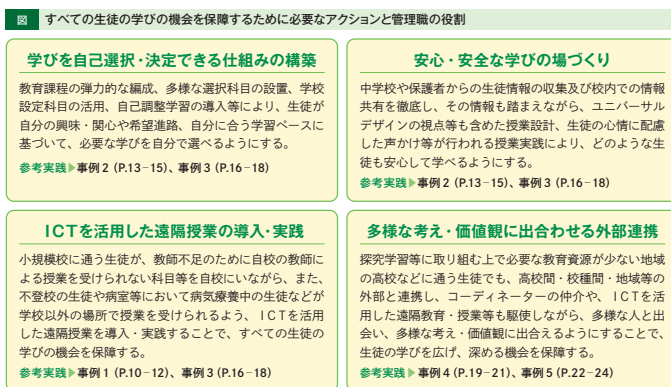
次に、「多様な考え・価値観に出合わせる外部連携」について取り上げた。柏木は、「視聴者から『マンパワー(教師数)が少ない中で、生徒の多様な学びを保障するための具体的な方法や工夫にはどのようなものがあるか』と質問がありました。限られた人的資源で生徒の多様な学びを最大限保障する上で、外部連携は有効だと考えられますがいかがでしょうか」と、中森教授に意見を求めた。

中森教授は、福井県立若狭高校での学校改革の経験から、学校に「ゆとり」や「余白」を持たせることが重要だとし、「私が最初に行ったのは、カリキュラム・オーバーロード(カリキュラムの過積載)への対応でした。教育課程を見直すことで、放課後などにゆとりが生まれ、担任が生徒と丁寧に面談できるようになりました。すると生徒の担任への信頼度が高まり、進学実績の向上にもつながりました」と話した。

中森教授はカリキュラム・オーバーロードを見直した上での外部連携の実践として、「探究学習を軸とするカリキュラム・マネジメント」「学校を地域の学びの拠点にする取り組み」を紹介し、柏木も「地域とつながることで、教師の負担を軽減しながら、豊かな学びを実現することが可能になる」と賛同した。



写真2 中森教授はかつて高校教師として、地域連携や若狭地区の県立高校再編整備などに携わり、定時制課程の教頭も務めた。



管理職の柔軟なカリキュラム・マネジメント、リーダーシップ、ファシリテーションの下、上記のようなアクションを取り入れ、実行する

※各事例は本誌記事を基に編集部で作成。

図 本特集では、学びの機会を保障するために必要なアクションとして上の4点を示し、管理職としてどのような役割を担うべきかを提言した。

そして、「ICTを活用した遠隔授業の導入、実践」についての意見交換も行われた。中森教授は、過去の勤務校での実践を述べ、「長期入院している生徒や相談室、保健室に登校している生徒にとっても、遠隔授業は有効」と振り返った。そして、学校間の連携を強化することによって多様な生徒の学びを保障できると強調した。

「安心・安全な学びの場づくり」については、「本特集で取り上げた仙台大志高校の事例について、中学校で不登校だった生徒が『遅刻厳禁・9回欠席で単位不認定』という高いハードルを越えられるように、先生方は具体的にどのような支援を行っているのでしょうか」という視聴者からの質問に対する同校の回答を柏木が紹介した。同校は、「完全単位制選択授業」や「個を大切に作る空間づくり」といった仕組みを整えるとともに、「家庭と密に連絡を取ったり、教師間での情報共有をしっかりと行ったりする」など、生徒はもちろん、保護者や他の教師とのコミュニケーションを大切にしている。一方で、同校の管理職からは、生徒へのきめ細かい配慮を行うがゆえに、教師への負担が大きいことを懸念していることも報告された。そうした状況は多くの学校の課題でもあり、その対応策として中森教授は、「職員室での心理的安全性の確保」を挙げ、「校長が教師の話に耳を傾け、できることから迅速に対応し、校長と教職員との信頼関係を構築することが大切だ」と述べた。併せて、「カリキュラム・オーバーロードの改善」や「教職員同士の対話の場の設定」も必要だと提言した。

結びとして柏木は、「本日の対談を通じて、教師が『生徒とともに』悩み、考え、行動することの重要性を改めて感じました。そして、教師が『仲間とともに』協働できるような関係性を築き、生徒にとっても教師にとっても学校を安心・安全な場にしていくためのリーダーシップや総合プロデュース力が、これからの管理職には求められるのではないかと思いました」と述べた。最後に本セミナーの企画を担当したVIEW next編集部の青木彩子に対談の振り返りと閉会の挨拶を行い、25年度もオンラインセミナーの実施を継続することを伝え、セミナーは終了した。

参加者の感想

生徒にも教職員にも心理的安全性が必要であり、そのために校長としてどうすればよいのかのヒントをもらった。

「少しずつ変化を楽しみながら取り組む」など、示唆に富んだキーワードを分かりやすく理解できた。また、「生徒とともに、仲間の教師とともに」という考え方に非常に共感した。

今すぐにもでも学校経営につながるような内容だった。

カリキュラムの過積載を解消し、ゆとりを生み出せるよう、まずは自分ができることからアクションを起こしていきたいと思った。

実践事例だけでなく、取り組む姿勢そのものについても参考になった。さらにいろいろ学んでみたいという気持ちになった。

アーカイブ動画のご案内

本セミナーのアーカイブ動画をご視聴いただけます。
下記の URL、または2次元コードからアクセスしてください。

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article31527/>



『VIEW next』 高校版 2025年4月号 特集テーマ連動オンラインセミナー開催のご案内

学校経営を支える「ヒト」における課題と方策とは何か？

——主体的に学び合う教師集団をつくっていくために

◎開催日時 2025年7月1日(火) 15時30分～17時00分

◎詳細やお申し込みは、下記URL、または2次元コードからご覧ください。

<https://view-next.benesse.jp/view/web-hs/article31890/>

